

## 小林倭子 自ら学び律する生き方

熊谷市史編さん室 新井 端

明治十二年、当時の小原村小江川に小林は生まれた。新規の風を好み、日本の将来・地域の未来を考える少年であった。中等教育を終えると、同窓の多くは家業を手伝うか、奉公に出るなど実社会に羽ばたくか、現在の教員養成大学に相当する埼玉県高等師範学校に進み、教育者となる道を選んだ。

当時有為の若者達の多くは学費免除の特典がある師範学校や士官学校を目指すが、もちろん入学試験は難関とされた。進路を決める前夜の、二六年県北部を襲った春霜をはじめとする冷害が起り、平年作の五割減収という甚大な被害を受けた。村では小学校の建設が延期となってしまった。この災害は小林の進路に影響を与えたものと思う。

寒村の実状を改善すべく、村を導く人材となる気概（自ら学び律する）を高めるとともに、周囲の期待も感じていたはずである。

明治三三年、師範学校卒業時には、熊谷駅まで郷党の旗行列が迎えたという。新築になったばかりの小原小学校教員（当時は訓導といった）に着任した。同年十一月には校長を兼務し、授業と学校経営の両輪を担うことになる。二二歳の青年であった。

小林の教育者としての第一歩はここから始まり、以来四六年間太平洋戦争終結まで、教育の最前線に身を置いていた。校長とはいえ授業を持ち、学校教育だけではなく村の発展を、学校経営者の視点からも考えていた。

授業では何を書いてもいい自由黒板設置により、遊びながら表現の面白さを気づかせる試みや、野外観察会、他校との合同授業を行った。大里郡内でも最低の就学率改善のため、農閑期の裁縫教室の開催、農産物品評会、運動会、地域村民への学校図書解放など、広範な施設利用者及び村民の知識向上、生活改善に係る催しや仕組みなどを考え実践した。三三歳から県の「視学」に任命され各地の学校での指導に当たっている。

大正時代は、大正デモクラシーといわれ、自由で活力ある気風の時期とされ、人格の修養や個人の尊重を掲げ、自ら学ぶ、自立した人間を育てる考えが教育界にも及んだ。深谷小学校長に赴任していた小林も、大正期新教育運動の旗手と言われた熊谷高等小学校長竹塚磯次郎らと研究と実践に取り組んだ。

この頃が最も充実したと思われ、持論の教育論を何度も寄稿している（「自由教育の研究」「自発活動を重視する教育案」「高等小学校の改善について」など『埼玉教育』）。しかし時流に流されるわけではなく中道をとる姿勢が一貫している。

昭和二年には大里郡教育長に推薦された。また、自ら学び律する姿勢のとおり、

深谷小学校長、双葉幼稚園長、深谷商業学校設立からその校長就任とすべて兼任しながら、何十倍といわれた旧制中学校の教育資格試験を受験し合格している。「勉強しない教師はチェーンのない自転車と同じで、形はあるが使い物にならない」と、若い教師等に話す一方、自らも実践していた。

軍国主義が忍び寄るなか、昭和七年に深谷三校長を退任し、敗戦まで私立校の教諭として教鞭をとった。この頃の所感をみると、時代風潮とは距離を置いて、冷静な目で地域の立て直しと教育の在り方を述べている。いわば、雌伏していた。

昭和二一年、最後の生徒を送り出した後、小原村の農地委員長を勤め、翌年には公選の村長となり、戦後処理と農地改革の道筋をつけた。

一方、新時代の教育を思い描いていたらしく、新教育制度の根幹にかかわる「教育委員会法」の国会審議に際し開かれた第二回国会文教委員会公聴会（昭和二三年六月二九日開議）の公述人に応募し、選ばれて意見を述べている。

そして、法の施行と同時に村長を辞し、埼玉県教育委員の選挙に立候補し、当選。この時七十歳であった。

初代埼玉県教育委員会委員長に推され、二期八年間在職し新教育制度の基礎を築く。

退任後は、ラジオ講座の受講や哲学書を愛読し、九十歳まで調停員と荒川幼稚園長を務めた。その見識に多くの人たちが影響され、また幾多の後進を世に送り出している。

小林は三時台を見事に生き抜いた気骨の人である。また、常に、努力することの大切さを苦も無く示し続けた人でもあった。

九二歳逝去、生誕地に眠る。



（熊谷市公連だより 第16号 平成25年より）